野地潤家先生著

「幼児期の言語生活の実態　Ⅱ」

本書は、副題に、「Ⅲ満二歳の言語生活の実態―昭和25・3・9～昭和26・3・8―」とあり、先生のご長男澄晴さんの満二歳期の言語生活の実態が、文本位に、かつ原則としては対話本位につぶさに記録されている一一八六ページにものぼる大著で、八三八一例もの対話例が収録されている。

本書の成りたちについて、先生はつぎのように述べていられる。

「長男澄晴の成長にしたがい、わたくしはそのことばの習得状況をカードに記録していくことを始めた。幼児期の言語生活の実態をつぶさに記録した先行調査例に乏しかったため、すべて手さぐりで進めなくてはならなかった。初めは父親のわたくしひとりが発意して進めていったが、途中からは妻一枝の助力・協力を得ることができるようになり、満六歳にいたるまで、子どものことばの採録を継続することができた。採録にあたっては、言語生活のありのままをとらえていきたいという気持ちがつよく、文（センテンス）本位・対話本位にした。ことばの生活のありのままをとらえることを思いついたのは、直接には、広島高等師範学校・広島文理科大学に学んで、昭和一六年（一九四一）以降、藤原与一先生から生活語の研究・調べかたについてねんごろにご教導をいただいたことによる。また、間接には、西尾実先生の戦前・戦後のご研究・ご提唱にたえず接して多くの示唆をいただいていたことによる。長男の誕生・成長にしたがって、そのことばの生活・ことばの習得を継続してとらえようと努めたのは、やむにやまれぬ気持ちに発しており、おのずと決意したというにちかい。（中略…ここで先生は、ことばの手書き採録に備えて、九カ月間にわたって速記法を身につけられる。）

わたくしは父親として公務の余暇を時間・事情のゆるすかぎり、妻一枝は母親として家事の合間を時間・都合のゆるすかぎり、長男澄晴のことばをできるだけ対話本位にカードに採集・採録していった。満六年間集積したカード群を、年ごと（乳児期・満一歳期～満五歳期）・月ごと・日ごとに採録順に原稿用紙に記述していくようになったのは、長男澄晴が小学校に入学した昭和二九年（一九五四）の、七月二五日からであった。一応の記述がおわったのは、それから満五年後の昭和三四年八月四日であった。」（まえがき　一～二ページ）

ことばの生活のありのままをとらえたいと思われ始めてから三十有余年、そのご苦心・ご努力は、質・量ともに、わが国はもちろん世界にも例を見ない、実の場における子どもの言語生活の実態、ことばの習得・発達のありのままの記述となって本書に結実している。本書のどの一ページにも、日々ことばを習得し、自己の生活（世界）をひろげていく子どもの生きた姿が躍如としていて、驚きにも似た新鮮な感動を与えられる。採録された一対話ごとに、その場の状況や事情、気づかれたことなどの説明が加えられている。そこにわたしどもは、ことばをありのままにとらえよ

うとされる野地先生ご夫妻の、ことばの採録にむけられる真摯さ、状況把握の的確さ、ご長男澄晴さんに対する深い愛情を読みとることができる。幼児言語研究のあり方・方法の本質がおのずから示されているのである。

この厖大なことばの実態の記録から、わたくしどもは、ことばの学習と発達、イメージの世界の拡大、遊びの発達、論理力の伸び、対話の成立、認識形成の諸相、対人関係の発展等々、あらゆる面から子どもの成長の実態をとらえていくことができる。

たとえば、対話の成立という視点から本書を見ると、二年四カ月の初めの日（昭和25・6・9〈金〉）に、つぎのような記述がある。

○バチュ　ワ？[1]（↓母）
○イッタ　ネ　カミヤチョー　エ[2]（母↓）
○マタ　クル　ヨ[3]。（↓母）
○クルネ[4]。（母↓）
○ブー　ユーテ　クル　ヨ[5]。（↓母）

（本文　356ページ）

この時期まで読み進んでくると、ほんとうの意味でことばのやりとりができ始めていることに気づかされる。それまでは、対話といっても、相手のことばのくりかえしや返事などによるやりとりが多く、相手のことばを受けてさらに展開させていくというやりとりはあまり見られない。ご長男澄晴さんのばあいは、二年四カ月ごろを、対話成立期としてとらえることができるのではないかと思われる。それ以前を、対話準備期とでもとらえてよかろうか。二年四カ月以降、人とのことばのやりとりは少しずつ上達していき、二年十一、十二カ月になると、やりとりに自在性・安定性がつき、しっかりとしたものとなる。対話確立期とみることもできよう。

これは一例にすぎないが、わたくしども読み手の興味・関心に応じて、どのようにも本書を読みとり、活用することができる。また、あとがきには、わが国における幼児期のことばの採録・研究の動向が詳しくまとめられており、新しい研究の方向も示唆されている。

野地先生は、つねに、「継続は力なり。」と、わたくしどもを励まし導いてくださる。その〝継続の力〟の何たるかを、目のあたりに具現してくださったのが本書である。本書を手にすると、わたくしどもも〝継続の力〟の結実を目ざして、日々努力しようという思いが強まっていく。

なお、本書につづいて、つぎのように順次刊行の予定になっている。

第Ⅲ巻―満三歳期の記録
第Ⅳ巻―四・五・六歳期の記録
第Ⅰ巻―満零歳・一歳期の記録

（昭和48年4月1日、文化評論出版刊、A5版　全一一八六ページ、定価二〇、〇〇〇円）

（足立茂美）